『学び合い』導入時の授業における教師の働きかけに関する事例的研究
― 実践歴の異なる授業者に着目して ―

教育実践高度化専攻
教育実践リーダーコース
國友　芽意

Ⅰ　問題の所在

中央教育審議会（2012）は，従来のような知識伝達・注入を中心とした授業から，教員と学生が意思疎通を図りつつ，一緒になって切磋琢磨し，相互に刺激を与えながら知的に成長をする場を創り，学生が主体的に問題を発見し解を見出していく能動的学習（アクティブ・ラーニング）への転換が必要である[1]と指摘している。

入江(2015)は，アクティブ・ラーニングにおいては，教師自身がファシリテーターであり，コーチであることを自覚する必要がある[2]としている。また，目黒（2004）は，子ども同士の関わりが生まれるためには，教師が子ども集団に対して，子ども同士の関わり合いが生まれるような間接的きっかけを与えることが有効であるとしている[3]。このように，教師が子ども集団へ働きかける役割をもつ授業の一つに，西川（2014）の提唱する『学び合い』がある[4]。『学び合い』は，「学校観」「授業観」「子ども観」の３点からなり，学習者相互の自由なコミュニケーションから課題達成を目指す学習である[5]。西川（2015）は，アクティブ・ラーニングの一つとしても，この『学び合い』の考え方を用いた授業を提案している[6]。

『学び合い』の授業における教師の働きかけについて，小林・西川（2007）は，「目標」「可視化」「課題」「賞賛」の発話が顕著であることを明らかとした[7]。これをうけ，三石ら（2012）は，実践歴が同じ授業者３名で研究を行ったが，それぞれの言動には差がみられないとしている[8]。しかし，この研究は実践歴の異なる教師の働きかけについて着目したものではない。さらに，調査対象となった学級は『学び合い』導入時か定かではない。

Ⅱ　研究目的

本研究は，『学び合い』授業の導入時において，実践歴の異なる教師の働きかけの違いを明らかにすることを目的とする。

Ⅲ　研究方法

1　調査対象
- 授業者Ａ（『学び合い』実践歴３年）
- 授業者Ｂ（『学び合い』実践歴０年）

2　調査期間
平成27年９月～12月

3　調査方法
- 学習における教室全体の様子を撮影するため，教室の対角線上にビデオカメラを設置して記録する。
- ICレコーダーを用いて授業者Ａ・Ｂの発話を記録する。

4　分析方法

［分析１］

授業者A・Bの発話プロトコルを「全体向け発話」「個人向け発話」に分類し，比較する。

［分析２］

授業者A・Bの発話プロトコルをKJ法によって分類し，児童に働きかける視点を比較する。

［分析３］

授業者A・Bそれぞれにインタビューを行い，「全体向け発話」「個人向け発話」の意図を調査し，比較する。

Ⅴ　結果・考察

［分析１］

表１から，実践歴のある授業者Aの方が「全体向け発話」の総量が有意に多いことが明らかとなった。

	全体向け発話	個人向け発話
授業者A	38	14
授業者B	13	7

約3倍

表１　１授業あたりの発話数の比較

しかし，表２より，「全体向け発話」「個人向け発話」の比率には差が見られなかった。

	全体向け発話	個人向け発話
授業者A	72.5%	27.5%
授業者B	64.6%	35.4%

表２　発話の比率

［分析２］

授業者A・Bの発話は「よいところ(15)」「気になるところ(9)」「願い(1)」「その他(1)」の26項目に分類され，実践者Aは実践者Bに比べ，発話の視点が多いことが明らかとなった。

［分析３］

実践歴のある授業者Aは実践歴のない授業者Bに比べ，「個人向け」発話であっても，全体に広める（可視化する）ことを目的として働きかけをしてることが明らかとなった。

引用・参考文献

1）中央教育審議会：「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて―生涯学び続け，主体的に考える力を育成する大学へ―（答申）」，p. 9，2012.（閲覧日 2015-11）

2）入江詩子：「アクティブラーニング導入期における参加型学習の役割」，地域総研紀要，13巻1号，pp. 23-34，2015.

3）目黒大樹：「子どもが自らの力で人間関係を形成していく過程について―教師の働きかけによる子ども同士の関わりの変化に着目して―」，臨床教科教育学会誌，第3巻，第1号，2004.

4）西川純：「クラスがうまくいく！『学び合い』ステップアップ」，学陽書房，p. 65，2012.

5）西川純：「『学び合い』スタートブック」，学陽書房，pp. 42-97，2010.

6）西川純：「すぐわかる！できる！アクティブ・ラーニング」，学陽書房，p. 31，2015.

7）小林千鶴・西川純：「子ども同士の学び合いを促す教師に関する研究」，臨床教科教育学会誌，第7巻，第1号，pp. 17-54，2007.

8）三石梨沙・三崎隆：「教師の『学び合い』の経験年数とその言動に関する事例研究」，臨床教科教育学会誌，12巻，第2号，pp. 83-90，2012.

指　導　　西川　純